

南ぬ風

Vol.14
2010.1~3
冬号



【南ぬ風インタビュー】 アジア地域における緑化技術や生物多様性維持の拠点になってもらいたい。

農学博士 明治大学農学部教授／興水肇

《沖縄の色・形》 沖縄の風景を形造る／赤瓦



ふしぎがいっぱい

公園点描

海洋博公園
熱帯ドリームセンター

クロトンパティオ

パティオというのは、スペイン語で中庭のこと。熱帯ドリームセンターのクロトンパティオは、うすぐらい玄関ホールと対峙して、クロトン独特のあざやかな色彩が、コンコンと湧き出る泉、防風壁のレンガ越しに見える青い空と遠見台、美しい花々とよくマッチして中世の中庭を連想させます。



ふえー 南ぬ風 かじ

誌名『南ぬ風（ふえーぬかじ）』について

「南ぬ風」は梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信することを意味しています。

C O N T E N T S

南ぬ風インタビュー Vol.7

3

アジア地域における緑化技術や生物多様性維持の拠点になってもらいたい。

農学博士 明治大学農学部教授／興水肇



沖縄の色・形

6

沖縄の風景を形造る 赤瓦

取材協力／沖縄県赤瓦事業協同組合・(有)八幡瓦工業



首里城公園の管理運営

8

・書院・鎖之間庭園

首里城内唯一の庭園を守る



財団の事業紹介

10

調査研究事業

深海生物採集・調査にROVを導入／壁面緑化に適した植物

琉球王朝時代の美術工芸資料の収集

普及啓発事業

亜熱帯緑化事例発表会／中学校出張授業／マナティーしく体験



沖縄の自然 南の島の植物と動物たち

14

シリーズ沖縄の大木⑦ サキシマスオウノキ

シリーズ沖縄の希少動植物⑦ ホシザキシヤクジョウ/ミナミコメツキガニ



沖縄の民話

16

鯨の由来(波照間島・渡嘉敷島) 資料提供/NPO法人沖縄伝承話資料センター

ニュース&イベント情報(1月～3月)

18

総合研究センター、首里城公園管理センター、海洋博公園管理センターのニュース&イベント情報を紹介



ふしぎがいっぱい公園点描

20

海洋博公園 熱帯ドリームセンター クロトンパティオ



表紙について
一本道
名嘉睦稔（なかぼくねん）
一九五三年伊是名島生まれ。
版画家。造形作家。月桃紙に裏手彩色と呼ばれる技法で制作される作品群は、われわれ現代人が見過ごしてしまいがちな大自然の機微、生きとし生けるものの魂の声を、時に優しく、時に力強く、私達に伝えてくれる。

「屋上や壁面に 緑の絵を描きたい」

——まずは、先生のご専門のことからお伺いしたいと思います。

輿水 緑地工学と言いまして、緑を育て、緑を作り、緑の土地をどう守っていくかという研究です。これは専門家だけではなく行政も民間も、市民の一人ひとりも行っていることです。しかし、緑化をちゃんとするためには計画や制度が必要になります。そういう意味では、行政や市民の役割というのが重要になります。一方で技術面を支える部分がないと、計画だけで終わってしまいます。すなわち、緑化の技術論をやるというのが緑地工学なんです。

狭く捉えれば、人間が街や工場を造ってグレーにしたり、山を切り開いてブラウンにした所を、どうグリーンにしていこうかということです。山はまだ土があるからいいですが、街や工場跡には土がありません。そういう灰色の地域を緑にしていこう技術の研究というのが緑地工学のメインになります。

具体的に言えば、建物の屋上や壁面です。そこに、緑の絵を描きたいということです。コンクリートに直接、植物を植えることはできません。多くの植物は土が

ないと育ちません。そういうものをどうやって作るか、人工の土壌でもいいですし、いろんな資材をグレーのところに貼りつけて、その上に緑を貼りつけていくことも考えられます。もちろん育てる工

アジア地域における 緑化技術や生物多様性維持の 拠点になってもらいたい。

夫も必要になります。

そのための技術開発なんです。お金がかかる膨大な技術だと、何のための緑かということになります。そこで、植物の生育を横から下から支える技術といいます

か、見えない技術、地味な技術、そんな技術を考えています。自然の降水を上手に使って、あまりエネルギーを使わないで、水をうまく循環させて植物の力で緑にしていこう、そんな緑化ができないだろう

緑を作り、緑を育て、緑を守る。緑地工学という研究分野で、都市緑化に取り組む輿水先生に、緑化の目的や意義について語っていただきました。



農学博士
明治大学農学部教授

輿水 肇

Hajime Koshimizu



【こしみず はじめ】1944年東京都生まれ。1968年東京大学農学部卒業。同大学大学院、同大学助手を経て1979年明治大学農学部専任講師、1989年明治大学農学部教授。園芸学・造園学、環境影響評価・環境政策、環境動態解析等の幅広い分野で活躍。日本緑化工学会長、日本造園学会会長(2001・2003)、日本芝草学会顧問、(社)日本公園緑地協会公園緑地研究所所長などを務める。著者に「環境共生時代のアセスメント」(東海大学出版会)、「立体緑化による環境共生」(ソフトサイエンス社)他、著書・論文多数がある。

かと、それが緑地工学が扱う技術の全体像、イメージですね。

観賞価値のある植物

——緑化に関して、特に注目されている植物はありますか？

興水 例えば、ヨーロッパなどでは、屋上や駐車場に自然に生えてくる植物などがあって、そこそこ観賞価値もあります。それに比べ、日本はいろんな植物が多すぎて雑草だらけになります。多様性は高いんですが観賞価値があまりない。自然のままでは、きれいな緑化にならないんです。

建物の屋上などでは、デッキを5センチくらい敷いて、水を少なうして乾燥に近い状態にしてやると、



緑地工学研究室に隣接する建物の屋上で、屋上緑化について説明する興水先生。

雑草的なものは生えてこなくて、観賞価値のある植物が生えてきますので、そういう緑化をしようという動きがあります。

また、この大学がある多摩丘陵あたりでは、里山が開発されて荒れている土地もあります。そうすると、今まで普通にあった植物が希少植物になる可能性も出てきますので、絶滅しそうなものを集めてきて、ここで遺伝子の保存をしようということも行っています。そういう意味で注目している植物もあります。

新しい植物ということでは、やはり壁面緑化のための植物ですね。これは、まだ未開拓の分野でもありますから、いろんな植物を試してみたいと考えています。



(上)植栽したものと自然に生えてくるものを混在させている。(下)多摩丘陵にあるドングリ系の植物。

——先生は芝生の研究もなさっていますが、芝生についてはいかがですか。

興水 芝生は非常に特殊な使い方をされている植物です。人間が植物を使う場合は、食べたり、繊維で衣服を作ったり、材木として建築資材に使うわけですが、芝の場合は刈り取った後を使います。収穫したものは捨ててしまいます。ただ、芝草というのは雨の多い日本ではあまり育ちません。ステップという気候帯、非常に雨が少ない乾燥地帯に育つんです。日本では溶岩地帯とか隆起サンゴ礁とか、海岸の砂地とかに限られています。ですから、沖縄の万座毛の天然芝には驚かされました。それで、2002年に日韓共催

のワールドカップがありました。FIFA^{※1}には常緑の芝生じゃないとダメだという条件があったので、どうすれば常緑の芝ができるかという研究が始まって、その結果、今や学校の校庭とか駐車場のグリーンパーキングなどに発展しています。こういう研究も緑地工学のテーマになります。

自然が人間性を回復させる

——緑化に関して日本の状況はいかがでしょうか。

興水 環境がその地域の自然感や価値観をかたちづくるという環境決定論がありますが、日本をはじめ緑が豊富なアジア地域では、やはり緑化に関する意識が少し低いような感じがしています。もっと関心を持ってもらいたいと思います。

緑が豊富なアジア地域は自然に変化があります。四季があつて季節の移り変わりがあつて。そうすると人の心も循環する。嫌なことは水に流して新たな気持ちでという思いも生じる。自然の力が人間性を回復するエネルギーになるんです。

ですから、都市に緑が必要なのは人間らしさを維持するため、人

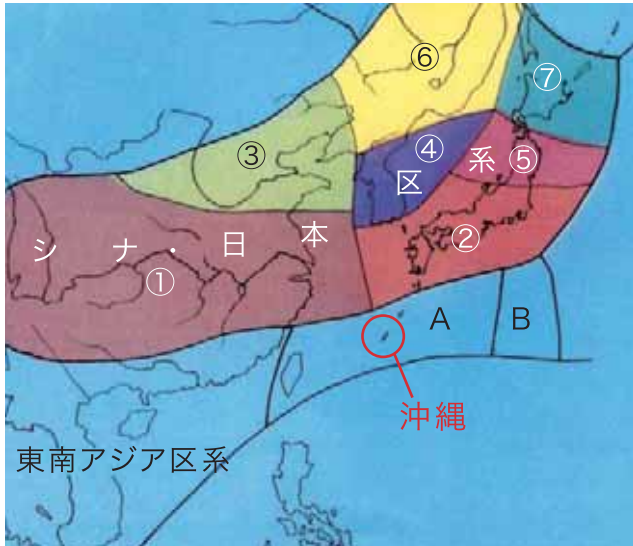
間として生きていくためのエネルギーを供給するためなんです。小さな花壇でもいいし、芝生でもいい、そこには小さな昆虫も飛んできます。人間はいろんな意味で、自然の営みから生きていくエネルギーをもらっているんです。そこになかなか気づかないんです。

部分が全体を高めていく

——植物は生命の源のような感じがしますね。

興水 たまたま私が植物をやっているからではないですが、地球全体で考えると動物もいます。来年は「国際生物多様性年」でもありますが、今の生物多様性の議論というのは、どうしても絶滅危惧種や自然保護的な観点からの話が多くなりがちです。しかし、実際は人間も生物多様性に深く関わっています。例えば、外来産のブラックバスですが、導入したときは一時的にでも生物多様性が高まったんです。まずいのは、元々いる種を食いつぶすからで、賛成している人は「魚が豊かになるのが何がいけないの？」と言うわけです。それに対する答えが全然出されていません。

沖縄でも一時期、外国産の植物を使うのはいかがという意見がありました。私はコントロールで



【シナ・日本区系の区分】

〔現職現代科学大事典・学研〕を参考に作成

- ①華中区 ②日鮮暖帯区 ③華北区 ④朝鮮区 ⑤日本温帯区 ⑥満州区
⑦南樺太・北海道区 A 琉球地区 B 小笠原地区

きる範囲内であつたら問題はないと思っています。それを上手に使っていけば生物多様性が高まるし、景観の豊かさも高まるし、人間の心も豊かになってきます。

沖縄の植物は、本州の植物が中國大陸の系列であるのに対し東南アジア系列です。台湾やフィリピンからいろんな植物が入ってくる、これは自然破壊でもなんでもない。むしろ、こういう地域で減少している植物を沖縄で上手に育てていけば、この地域全体の多様性を高めていくことになります。部分が全体を高める、そういう役割を持つことになります。沖縄はそういう場所です。生物多様性の

あり方を冷静に議論して、チェックシステムを確立することが大事だと思います。

どうすれば魅力的な緑地がつくれるか

——このたび、先生には当財団の『総合研究センター』の研究顧問に就任していただきましたが、海洋博公園との関わりをお話いただけますか？

興水 沖縄の復帰は1972年ですが、私は1968年に大学を卒業して大学院の助手をしていました。そういう時に、沖縄海洋博覧会のプロジェクトが立ち上がったので、緑地計画の基礎調査が必要だということでも声をかけていただきました。

意外だったのは、当時の沖縄は自然的な植生が少なく、ほとんど人の手が入っている感じでした。植生学で言うところの代償植生です。自然植生を切ったあとに代わりが生えてくる植生です。沖縄は戦争がありまし

たからね。戦争は自然を破壊する一番最悪の行為です。そのような厳しい破壊を受けたけれど、温暖で雨が多い亜熱帯独特の植生回復の早さといえますか、すごい力で再生しているなと感じました。

その後、私の指導教授であつた本間啓先生が、財団の理事長になられて、それで「お前も勉強しに来い」ということで、どうすれば魅力的な緑地ができるかというテーマをもって、海洋博公園に足を運ぶようになったわけです。

——最後に、『総合研究センター』について、期待や要望などございましたらお聞きかせください。

興水 このたびの『総合研究センター』の設置は、記念公園の事業としてではなく財団でつくられたわけですから、非常に大きな意味があると思います。沖縄のために自由に仕事ができます。本部のため、名護のため、那覇のため、沖縄のためにいろんな調査研究ができます。また、技術的な提案やプランができますから、沖縄の緑化のためだけではなく、東アジア、東南アジア全体の緑化や生物多様性の維持など、いろんな意味で技術開発の拠点としての役割も担っていてもいいと思います。

(平成21年11月4日、明治大学生田キャンパス、緑地工学研究室にて)



土の代替物となる木材チップ。いろいろなチップの組み合わせが試されている。

※3.総合研究センター

環境問題、産業振興、公園機能の向上に関する調査研究や普及啓発事業を拡充・推進するために(財)海洋博覧会記念公園管理財団が設置した組織。

※2.国際生物多様性年

国際連合では、1992年の「国連環境開発会議(地球サミット)」で採択された生物多様性条約に基づいて、2年おきに締約国会議を開催しているが、2010年の会議(開催地:名古屋市)が第10回となり、この節目の年を「国際生物多様性年」と位置づけている。

※1.FIFA

国際サッカー連盟(フランス語:Fédération Internationale de Football Association)。本部はスイスのチューリッヒ。

沖縄の風景を
形造る

赤瓦

青空と木々の緑に映える赤瓦は沖縄独特の風景だが、近年、そんな風景が見られなくなりつつある。
“沖縄らしさ”のためにも赤瓦の復活が望まれる。
赤瓦の生産地として知られる与那原の瓦工場を訪ね、赤瓦の歴史や特徴、赤瓦づくりの現状について伺った。

取材協力／沖縄県赤瓦事業協同組合・(有)八幡瓦工場

外国人も賞賛した風景

その昔、琉球王朝時代には瓦奉行という役職があり、庶民が赤瓦を使用することを禁じていたが、開港場のある那覇の庶民だけは許されていた。防火のための施策だったという。そんな那覇の港を訪れた外国人たちは、屋敷を囲むフクギや竹、芭蕉などの緑に溶け込んだ赤瓦の風景に心を奪われたようである。

琉球王朝時代に那覇の港に降り立ったフランス艦隊の宣教師が、パリの海外布教協会に送ったといわれる手紙には、「琉球の佇まいはヨーロッパのどの庭園よりも美しい」との文言が残されている。また、戦前、日本民芸協会の一員として

赤瓦の組み合わせである半円筒型のウーガーラ(男瓦)と平板を少し反らした形のミーガーラ(女瓦)



て沖縄を訪れた式場隆三郎は、「船が那覇に入る時、吾々の眼を見晴らしめるものは、実に其の美しい瓦屋根です」(『琉球の文化』と記している。

立地条件に恵まれていた与那原

赤瓦の使用が広く認められたのは1889(明治22)年頃で、それに伴い首里周辺にあった瓦工場が、原料入手や流通に便利な与那原に移っていった。

与那原の上与那原一帯には、原料となるクチャ(第三紀層泥灰岩)が豊富にあった。また、戦前の与那原は山原船が着く港町で、薪や竹が山原から運ばれていた。薪は瓦を焼くための燃料となり、山原竹は屋根を葺くときに赤瓦の下に敷き詰める「葺き土」を固定させるのに使われた。さらに、与那原と那覇間には軽便鉄道が通っており、馬車での荷物運搬も便利だった。与那原は赤瓦製造の条件がすべて揃っていたのである。

沖縄戦では与那原も大きな被害を受

けたが、戦後の住宅復興で赤瓦工場が再スタートし、最盛期には17カ所もあったという。しかし、台風対策などで住宅が木造から鉄筋コンクリートに変わるにつれて需要が減少し、現在は3カ所のみとなっている。

赤瓦の赤はクチャの色

赤瓦の原料となるクチャは、アルカリ性の優良粘土で粒子が細かく、焼き上げても水分を少し吸収する性質があるという。沖縄県赤瓦事業協同組合の八幡昇理事長は、「赤瓦は夜露などの水分を吸収して、日中に水分が蒸発する際に熱を奪っていきますから、夜間まで熱を蓄えることがなく、住宅の中があまり暑くならないんです。それが県外の瓦と違う点です」と語る。

八幡理事長が経営する八幡瓦工場を訪ねると、工場の入口にクチャがうずたかく積まれている。クチャは現在も上与那原一帯の丘や畑から採取しているという。クチャは濃い灰色をしている。赤瓦の赤は赤土の色と思っている人もいるようだが、あれはクチャが焼きあがった時の色である。クチャに含まれる鉄分によって、あの独特の色が生まれるのだという。赤土も使われるが触媒的に使われる程度で、クチャが8に対して赤土2

の割合で混ぜた土が赤瓦の元になる。

赤瓦の生産工程は、クチャと赤土を土練したあと成型、乾燥、焼成という工程をたどる。かつては瓦職人がいて手作りで成型していたが、現在は金型が使われている。成型された瓦は50日ほど自然乾燥させ、ガス窯に入れて1000度前後の熱で焼き上げられる。

「薪のころは1日目は小さな火で、2日目から大きく、4日目には大火にした。すべて人のカンで薪を窯に入れていたので、大変な仕事でした。5日ぐらいで焼き上がったものです」と八幡理事長。火力の調整がうまくいかない時には生瓦(なまガーラ)となり、5年も経たな

ウーガーラとミーガーラ

本土の瓦は表面に釉薬を使うが、沖縄の赤瓦は素焼きである。それだけに、年数が経つにつれて落ち着いた色になり、風格が備わってくるのだという。

役物瓦。
左から成型後、乾燥後、焼成後



八幡理事長は「赤瓦造りは原料からすべてが沖縄で賄える地場産業です。学校や公共施設での優先使用だけでなく、一般家庭での使用が増えれば、昔の旅人が感嘆したような風景を再現できるし、観光立県としての景観づくりにも繋がります。赤瓦の良さをもっと見直して欲しいですね」と語っている。



赤瓦をもっと普及させたいと語る八幡昇理事長



首里城内唯一の庭園を守る



朝日に照らされる「書院・鎖之間庭園」(「京の内」から庭園を望む)

「書院・鎖之間庭園」は平成20年8月1日の公開ですが、平成21年7月23日には国の名勝にも指定され、首里城公園の新しい名所となっています。その庭園の維持管理について紹介します。

琉球王朝の美意識

書院は国王が日常の業務や賓客をもてなすために使用、「鎖之間」は王子の控所であったといわれています。「書院・鎖之間庭園」は、これら書院と鎖之間とが一体をなす首里城内で唯一の本格的な庭園で、沖縄県内のグスクの中で、庭園があったことが分かっているのは首里城だけだといわれています。

蘇鉄と松と白茶けた岩、簡素にして清冽、日本庭園を見慣れている目には異質な感じに映りますが、濃緑色の蘇鉄が南国ならではの趣を感じさせてくれます。

庭園の管理に携わっている技師の仲松辰弥さんは、「植物というよりも岩(琉球石灰岩)が顔になっていて、それに準ずる形で蘇鉄と琉球松が植栽されています。あまり多くの種類を使わずに、2種類で全体のバランスが取られていてシンプルです。琉球王朝の美意識みたいなものが感じられますね」と、庭園の特徴について語っています。



庭園の魅力について語る仲松辰弥さん

議論になった「わだかまった松」
「書院・鎖之間庭園」の復元作業はかなり難しいものだったといえます。平成13年・14年の2年間にわたって遺構の発掘調査が行われましたが、その調査結果や古地図・配置図・明治・昭和初期に撮影された古い写真を基に沖縄総合事務局が復元に向けての検討委員会での結論を受けて庭園を復元しました。

庭園の多くは遺構が利用されていますが、戦中及び戦後に破壊された露岩部分は、新たに琉球石灰岩を積み上げて表面を彫り上げ、露岩風に仕上げられています。蘇鉄や琉球松については、候補の樹木を探し出し、モニタージュ写真を作成して検討されたといえます。

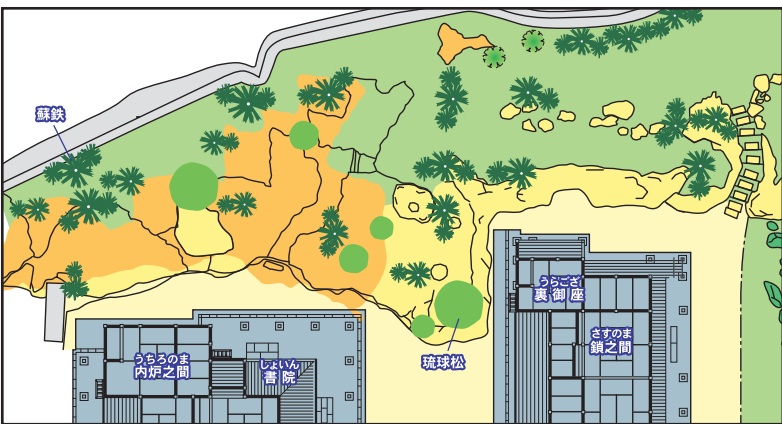
特に、冊封使が庭園を賛美して詠んだといわれる「わだかまった松と蘇鉄



議論的となった「わだかまった松」

とを、奇怪な格好をした石の間に、互い違いに植えている「のゝわかまった松」について、どのような松だったのか何度も議論が交わされたといえます。

露岩は、ほとんどが琉球石灰岩ですが、鎖之間の側面の庭には山原で産出される緑色片岩が使われており、庭の片隅には発掘調査のときに出てきた岩の一部が置かれています。また、書院・鎖之間の建物周辺には、サンゴの破片を砕いたサンゴ砂利が敷き詰められています。「庭園でサンゴ砂利を敷いている所はここ以外にはないでしょうね」と仲松さん。



「書院・鎖之間庭園」の植栽図



琉球石灰岩に蘇鉄と松がバランスよく配置されている

害虫と雑草との戦い

庭園の維持管理については、「露岩管理」「芝生」「松」「蘇鉄」その他の多年草「その他の樹木」の6項目について、庭園復元整備検討委員会から「管理作業の要点」が示されており、仲松さんたちは、その要点に従って維持管理に努めています。

仲松さんたちの1日のスケジュールは、8時半の開園前の樹木類への灌水、植栽部分やサンゴ砂利などの清掃、盆栽への水やりなどがあります。これらの作業のほとんどが、お客さまが入館される前の限られた時間内のため、短時間で効率的に作業を行い、ちよつと

した雑草でもこまめに取るようにしており、開園時間内に作業が及ぶ場合は、景観に配慮して「作業衣」を着用しているといえます。

また、現在、特に注意を払っているものに「クロマダラソテツジミ」という蝶がいるとのこと。この蝶は蘇鉄の新芽に卵を産み付け、卵から孵った幼虫が新芽を食い荒らしてしまうといいます。特に夏場は毎日のように飛来してきて、1回につき何百個という卵を産みつけるため、毎日巡回して薬剤をかけたり、目に見える幼虫はピンセットで取っているといいますが、しばらくは目が離せない状況だといいます。

樹木以外では芝生の管理が重要です。庭園内の芝生は、沖縄在来種の与那国町の高麗芝が使われていますが、他の庭園と違って、城壁の高台にあるこ



上:根気のある芝生の中の雑草取り
下:クロマダラソテツジミの幼虫



作業衣を着用しての水やり

とから風当たりが強く、毎日除草をしても、シロツメグサやセンダングサなどの種が飛んできて、すぐに芽を出してしまいます。このため、毎日のチェックが欠かせないといえます。



鎖之間の側面の庭。芝生に緑色片岩が配置されている

台風対策が課題

この他、仲松さんたちが一番気になっているものに台風があります。高台にあるために平地と比べて風当たりが強く、何よりも植物への影響が心配されます。「台風が襲来してきても、お客さまがいる間は支柱を立てるわけにはいきませんから、我々としても閉園後か、暴風域に入ってくる直前にしか対策ができませんので時間との勝負ですね」と仲松さん。幸いにして、まだ台風との遭遇はないとのことですが、台風対策が大きな課題となっています。

深海生物採集・調査に ROVを導入

沖縄美ら海水族館では、沖縄周辺の深海域に分布している生物の採集、および飼育展示を行っています。近年、テレビや書籍などで注目を集める「深海」ですが、「地球上最も深い深海に行ったことがある人は、宇宙に行った人より少ない」と言われるほど謎が多く、好奇心を掻き立てられます。沖縄も例外ではなく、深海に囲まれた深海生物の宝庫なのです。

現在、水族館の展示生物の多くは、釣り、カゴ、刺網や延縄といった、沖縄のウミンチュ（漁師）が従来行っている方法で採集しています。これらの採集方法では、魚類や甲殻類が中心となりますが、沖縄の深海には未だ名前もついていない、小さな無脊椎動物も多数分布していると考えられます。そこで、これ



写真：上 ROV、下 作業風景

写真：ROVで採集した生物
左 ゴカクヒトデ科の一種、中央 ミナベトサカ
右 ホシベニサンゴガニ

まで採集不可能だった生物の調査と収集を目的に、平成20年度からROV (remotely-operated vehicle)を導入、運用しています。

今回導入したROVは、遠隔操作により水深500mまで潜航可能な小型の潜水艇です。ROVは、やや複雑な海底であつても、映像を見ながら安全に海底探査を行うことが可能です。さらに、マニピュレータと呼ばれる腕を用い、目視により必要な生物だけを採集できるため、従来の採集方法よりも海底環境に配慮した調査が可能です。これまでの調査で、新種と考えられる生物も採集され、各方面の研究者からも注目を集めています。今後、ROVは展示と調査の幅を広げる上で、大いに活躍することが期待できます。

さらに、飼育展示を行っていく上で、深海生物が暮らしている環境を再現することは重要です。これまでは漁具に付着している生物や海底の岩、泥な

壁面緑化に適した植物の調査

どが唯一の手がかりでしたが、ROVの導入により、実際に目で見て海底の環境を観察できるようになりました。今後の深海生物の長期飼育や繁殖を行っていく上で、画像データも貴重な資料となるのです。また、ROVを用いた環境学習や、普及活動にも活用していきたいと考えています。

ROVでの深海生物調査は、まだまだ始まったばかりです。沖縄の深海の真実を多くの方に知っていただくために、今後も幅広くROVを活用した調査を続けていく予定です。

近年地球温暖化や都市部におけるヒートアイランド現象等の緩和のため、植物による屋上緑化や壁面緑化といった特殊緑化が注目されています。本土での研究や開発事例は多いのですが、沖縄県での報告は少なく、広く普及していないのが現状です。さらに、沖縄県は、亜熱帯気候に属し、台風襲来による物理的被害、夏季の強い日射しや少雨による乾燥、冬季の季節風や強風時の塩害等、特殊な環境といえます。そのようなことから、壁面緑化で使用する植物については、潮風害、乾燥等の厳しい環境に耐えること、更に、蒸散機能等による冷却効果が望め

琉球王朝時代の 美術工芸資料の収集

当財団は、平成4年の首里城公園開園以降、琉球王朝時代の貴重な文化財を収集する活動を行ってきました。

琉球王国は、明治政府による沖縄県の設置で終焉しました。そのため、首里城や周辺士族が所有していた王朝文化にゆかりのある文化財は散逸してしまい、王朝時代の類いまれな工芸作品を製作していた職人たちの作品の需要がなくなり、製作技術は徐々に途絶えていきました。また、県内に所在していた美術工芸品や首里城を始めとする建造物のほとんどが沖縄戦によって焼失してしまいました。

しかし、戦火を免れたり、国内外に所在していた美術工芸資料も少なくありませんでした。そこで当財団は、将来に向けて沖縄の歴史文化の継承・展開を図れるよう貴重な琉球王朝時代の美術工芸資料を収集する活動を続けてきたのです。

現在、420件700点の資料（平成4年の首里城公園開園時に国・県・市町村等の協力を得て財団内に創設された首里城基金で収集された資料を含む）を収集しており、中には沖縄県指定文化財となっているものもあります。今後とも琉球王朝時代の美

ることなど、沖縄の環境に適した植物を選定することが必要です。

そこで沖縄に自生あるいは導入されているツル性植物から自生種13種、導入植物6種を選出し、植栽試験を行ない、登はん特性、緑化効果（被覆率）等を調査しました。試験方法は、亜鉛メッシュを用いて作成した柵を縦に設置し、その下にプランターを置いて植物を植栽しました。

ツル性植物の登はん器官は①幹枝（茎）で巻きつきながら登る、巻つる・②茎あるいは葉の変態による、巻ひげ・③葉柄で巻きついて登る、巻葉柄、があげられ、今回の調査は巻つるがギンヨウアサガオ、ハマニンドウなど16種、巻ひげはテリハノブドウ1種、巻葉柄はヤンバルセンニンソウとリュウキュウボタンツルの2種を用いて実施しました。また、種によって縦方向の伸長が早い種、横方向の伸長が早い種があり、これらの違いによって適した壁面緑化の方法が考えられます。

コウシュンカズラやハマニンドウ、タイワンクズ、ギンヨウアサガオ等は、巻ツルで縦方向に早く伸びるタイプで、ロープやワイヤーなど補助資材を1本ずつ縦に張り、線で緑化する方法に適しています。また、テリハノブドウ、コンロンカ、イルカンダ、メキシコサワギク等は、巻ツルで横方向に早く伸びるタイプ、巻ひげや巻葉柄で登はんするタイプで、縦だけでなく、横の補助資材がないと登はんしにくいことから、今

術工芸資料の収集に努め、文化遺産の鑑賞等の機会を提供することにより、沖縄の歴史文化に関する知識の普及啓発に寄与していきたいと考えております。



巻ひげで登はんするタイプのテリハノブドウ



巻つるで縦方向に早く伸びるタイプのコウシュンカズラ



調査地点の全景

白澤之図
沖縄県指定有形文化財黒漆菊花鳥虫七宝繫沈金食籠
沖縄県指定有形文化財黒漆牡丹七宝繫沈金食籠
沖縄県指定有形文化財

亜熱帯緑化事例発表会

毎年10月に開催される沖縄都市緑化月間は、都市における緑の保全と創出を積極的に推進し、住民による緑豊かな街づくりを促進するた

め、広く県民の理解と協力を得る目的で実施されます。期間中は、都市緑化コンクール、沖縄都市緑化祭、都市公園等愛護活動等の各種行事を行っています。

当財団も沖縄都市緑化月間に共催し、「亜熱帯緑化事例発表会」の事務局を担当しています。この発表会は、緑化関係者及び民間等の調査研究や体験、緑

化活動等を通して得た知識、緑化事例の発表を行う場であり、また、県民に広く公表することで、緑化意識の高揚、都市緑化の普及啓発に資するものです。



事例発表会の様子

当発表会は、昭和54年度に始まり平成21年度で28回目をむかえました。当初は、「都市緑化技術研究発表会」でしたが、昭和55年度からは「亜熱帯造園技術研究発表会」に改称し、平成5年度からは、多くの緑化関係者が参加できるよう「亜熱帯緑化技術発表会」になりました。

した。また、平成19年からは「亜熱帯緑化事例発表会」へ名称を変えて開催しています。最近の傾向として、地域での緑化活動に関する緑化事例の発表が増加しています。住民参加の緑化活動や地域美化の事例について、実際に活動している方の経験や成果についての発表で、それぞれの緑化に対する熱意が込められています。また、この発表会には、従来からの緑化技術の研究部門も含まれています。沖縄特有の気候や自然条件にあった緑化技術等について、様々な側面から課題へアプローチした新しい緑化技術等の報告もあります。

今後当財団は「亜熱帯緑化事例発表会」の開催を通じて、沖縄の緑化活動や緑化技術の研究を支援していくとともに、都市緑化の普及啓発に努めていきます。

沖縄県立与勝緑が丘中学校出張授業

沖縄県立与勝緑が丘中学校は、県立与勝緑が丘中学校で平成19年11月から平成21年10月まで、2年間にわたってサンゴの出張授業を行いました。この授業は、県立与勝緑が丘中学校の渡邊正俊教諭が日産科学振興財団の理科・環境教育助成を受けて行うプロジェクトの一環です。

「サンゴガイドになろう(サンゴの教材化と環境を考える素材としてのサンゴ)」として、月に一度、飼育係がサンゴを題材に実験や生物観察の指導をします。

サンゴは、沖縄の海を代表する生物ですが、学校でサンゴについて学ぶ機会ほとんどありません。このプロジェクトでは、サンゴを教材として理科の授業を行うこと、また、サンゴを通して沖縄の生物や生態系に対して理解を深めることを目的としています。

「光合成」の単位では、サンゴの体内に共生する褐虫藻に注目、実際に



刺胞発射実験の様子

褐虫藻の観察を行いました。光合成のしくみを理解し、さらにサンゴと褐虫藻の共生関係につなげる授業展開にしました。「動物の世界」の単元では、クサビライシの仲間を使い、口を開けてエサを捕食する様子の観察や、サンゴの持つ「刺胞」の発射構造を確かめる実験を行いました。また、サンゴの産卵の時期(6、7月)には、水族館で産まれたサンゴの卵やプラナリア幼生を観察しました。生徒達のサンゴを初めて見た感触や驚きや感動に、私達も多くのことを教えられます。一緒に楽しみ

ながらサンゴや海のことを、そして自分たちを取り巻く環境について学べるこの授業を私たちもとても楽しみにしています。

地域の子供たちがサンゴや自然環境について学ぶことで、将来、沖縄に根付いた技術、知識を身につけ、さらに、その技術・知識を伝える人になることを願っています。

当水族館では教育普及活動として、県内の学校に職員が出向き海洋生物の面白さを伝える、さまざまな授業や講演を行っています。



サンゴが餌を食べる様子を観察する生徒たち

「夏休みマナティーしく体験」

海牛類に属するマナティーとジュゴン詳しく知っていただく為、マナティー館では「夏休み マナティーしく体験」を実施しました。(実施回数10回、各回定員20名)

夏休み期間中の毎週土日に行った「しく体験」には、合計194人のお客様が参加し、レタスやニンジンなど餌の準備をはじめとする給餌体験を通してマナティーを間近で観察することで、マナティーへの興味や理解を深めていただくことができました。そして、体験後には飼育員によ



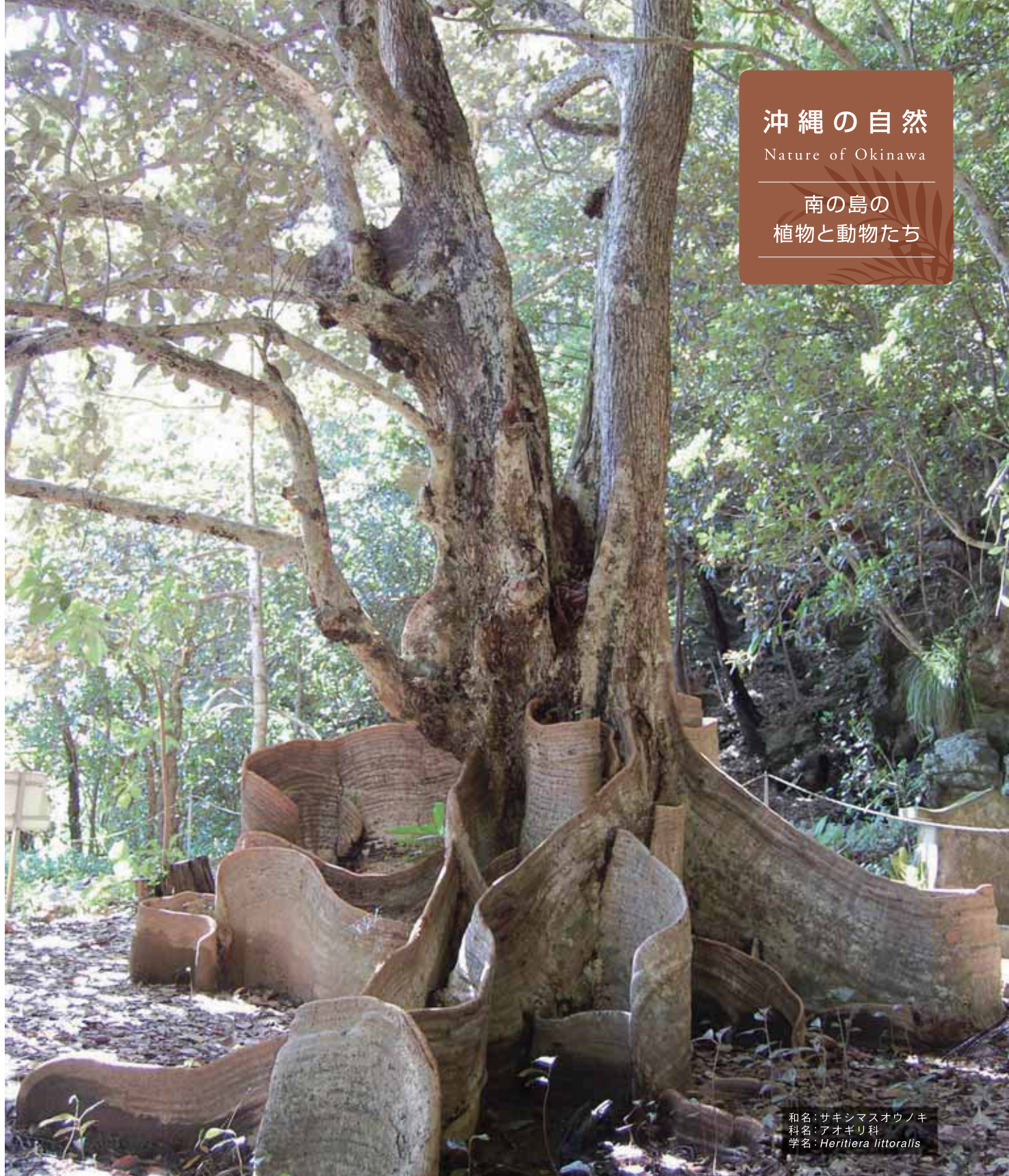
グループ学習の結果を発表する様子

る海牛類に関する学習会も行いました。内容は、同じ海牛の仲間であるジュゴンの剥製と水槽内のマナティーを見比べた、形態の違いの観察です。また、マナティーやジュゴンが野生下で餌とする水草や海藻についてスライドで紹介をしたり、クイズ形式の楽しい学習会を行いました。

今後もマナティー館では、マナティーをより身近に感じることのできる「しく体験」を実施し、来園者がマナティーと親しむとともに、マナティーやジュゴンについて楽しく学んでいただけるよう努めます。



マナティーしく体験の様子



和名:サキシマスオウノキ
科名:アオギリ科
学名: *Heritiera littoralis*

サキシマスオウノキ

サキシマスオウノキは、海岸や河口、マングローブ湿地に生育する常緑高木で、日本では、奄美大島以南の沖縄島、石垣島、西表島、宮古島、伊良部島、波照間島に分布する。和名は八重山諸島を指す先島と蘇芳(染料として利用されるスオウ)に由来する。大木を支えるための根が板状になった板根と、片側にはつきりとした稜のある広いボート型の果実が特徴的である。本種は防潮、防風林になる他、材は、建材(柱)、造船、枕木、樹皮は染料、薬用となる。

沖縄県東村川田に沖縄本島で板根が最も発達したサキシマスオウノキが生育している。この木は東村指定天然記念物に指定され、見事な12本の板根を形成している。樹の高さは18m、幹回り2.9mで板根の高さは2m近くある。樹齢は沖縄県緑化推進委員会発行の「おきなわふるさと名木」によれば、推定100年～150年以上となっている。

また、東村では、年に数回の周辺の草刈り等と、案内看板、板根を守るための注意看板を設置するとともに、地元の子供生徒には自然を学んでもらうために観察会等を行っている。

沖縄本島でこれ程の板根が形成されたサキシマスオウノキの樹をみることはほとんどない。今後も大切に見守って行きたいものである。



ホシザキシャクジョウ

不思議な形の腐生植物

本種は、沖縄島北部の山地中腹、林床の樹木根元近くで、落葉に隠れるように生育する小形の腐生植物。落葉の下に埋もれて生えること、また、自生地 of 植生遷移の進行等もあり、同じ場所でもなかなか見

ることができない。葉は無く、根茎は長さ2～3センチ、茎は単一または少し分岐、星形をした青色の花の直系は1センチに満たない。ホシザキシャクジョウは、もともと自生地と個体数が少なく、森林の伐採などにより個体数が減少している。

和名:ホシザキシャクジョウ
科名:ヒナノシャクジョウ科
学名: *Saionia shinzatoi*
レッドデータカテゴリー
絶滅危惧ⅠA類(沖縄県)、絶滅危惧ⅠA類(環境省)

動物 ミナミコメツキガニ

前歩きをするカニ

日本では、種子島以南に分布しており、河口域に広がる干潟に生息している。

干潮時に砂の中から出てきて、大きな群れを作り、ゾロゾロと移動。カニは横歩きをする種が多いが、ミナミコメツキガニは、前歩きをするカニである。

砂泥をハサミでつまんで口に運び、微生物などをこし取って食べ、砂を団子状にして足元へ捨てながら食事をする。

敵が近付くと、体を回転させながら、あつという間に砂の中に逃げ込んで隠れる。



食事時のミナミコメツキガニ

和名:ミナミコメツキガニ
科名:ミナミコメツキガニ科
学名: *Mictyris brevidactylus*
レッドデータカテゴリー
地域個体群(沖縄県)(※)

※地域個体群: 同種でも地域により遺伝的特性等が異なる事が多く、「種」ではなく、「個体群」として把握する必要がある生物に対し、「絶滅のおそれのある地域個体群」という概念が用いられる。



ゾロゾロと移動するミナミコメツキガニ



鯨の由来

波照間島

ここ波照間島でも秋になると、そのころに降る大雨で田んぼが水で一杯になります。島の人達は、その大雨に合わせて田んぼに牛を連れてゆき、一日中、牛に田んぼを踏ませて、底の土まで柔らかくし、もみだね 粃種をまいていました。牛にいていねいに踏ませた田んぼほど水もちが良く、雨が少なくても田んぼの水が枯れるようなことはありません。その年もおり良く、大雨が降ったので田んぼには水が一杯でした。どの家もせわしく田んぼを牛に踏ませて、粃種をまき始めました。

ところで、波照間島にどうにもならないほど不精な男がいました。「馬鹿みたいにあんなに一日中、牛を追っていられるか。」と思ったこの男は楽な方法を思いつき、八頭の

牛を引いて自分の家の田んぼがある下田原にしもたばる やつてきました。男は、手綱で牛の首を繋つなぎ、横一列に並べると、左はしの牛は田んぼの真ん中に、右はしの牛は田んぼの端に立たせました。「さあ、これでよし。ホーイ、ホーイ。」と男が牛を追うと、牛は思ったように横に並んで田を踏みだしました。「頭は、使わないと損をするからな。」と、得意になって牛を追いつたながら田んぼを適当に踏ませていました。

男は作業が早く終わったので、いい気になって居眠りをしてしていると、沖の方から大きな津波が寄せてくるではありませんか。島の人たちが寄せてくる津波を見て、あわてて高いブリブチの丘に登ったことさえも、この男は気づきませんでした。何か大きな音に目を覚ました男の目の前には、大波が近づいていました。

牛を逃がそうにも、すっかり繋いだ八頭の牛の手綱を解くこともできません。うろた

渡嘉敷島

海にいる鯨と陸にいる牛は、「ンモー」といつて鳴き声が似ていますね。実はもともと、昔、鯨は牛だったらしいですよ。昔々、陸に住んでいた牛は田んぼや畑にかりだされて、人間にこき使われていました。ところが、怠け者だった牛は「こう毎日毎日、朝から晩まで仕事をさせられていたんじゃない。ここから逃げよう。」と、思いついて、陸から海の中に逃げていきました。海の中をどんどん進んでいくと、そうすると竜宮城に着きました。そして、竜宮の神様に「どうかここに置いてください。ここでみんなと仲良く暮らしたいです。」とお願ひしました。竜宮の神様は、陸の生き物がここで暮らすのはどうか迷いましたが、牛があまりにも熱心にお願ひするので、可哀想に思い、置いてやることにしました。

けれども、もともと怠け者の牛は、他の海の生き物たちが、せっせと竜宮の神様のために働いているのを見ても何にもしま

えている間に男と牛達は、津波に吞まれて、はるかに沖までさらわれてしまいました。不精な男は、そのまま溺れて死んでしまいましたが、牛達は死にませんでした。波照間では、「牛は蹄に海苔ひすめが生えるまで泳ぐ。」と昔から伝わっているくらい、牛達は一頭も溺れずに泳ぎ続けました。だけど、いくら牛達が泳いでも陸地に着くことはありませんでした。それでもあきらめずに泳いでいる間に、牛達はとうとう鯨になって、海で生きようになりました。

毎年、秋になって粃種を田んぼに蒔くころになると、波照間島の沖には、潮を高く吹き上げる鯨がやってきて、モーウ、モーウと牛のような声で鳴きます。これは、もともと牛だった鯨が生まれ故郷の波照間島を恋しがってやって来るということです。

からの不満が竜宮の神様にたくさん寄せられました。竜宮の神様は牛を呼んで「おまえも少しは働きなさい。」と言いつけました。ここでは楽ができるだろうと思っていた牛は、竜宮でも働かせられるなんてとんでもない、と竜宮もいやになってきました。牛は「ここでも働かされるなんていやだ。逃げてしまおう。」と逃げだしました。すると竜宮を出た途端に、牛の姿が鯨の姿に変わってしまった。

鯨が逃げたのを気づいた竜宮の神様は、カンカンに怒って、「せっかく竜宮に置いてやった恩を忘れたな。許してはおけない。」と、アヤビトウ（シャチ）に鯨を探し出すように命令しました。アヤビトウは竜宮の神様からのいいつけで、いつも鯨を探し回り、見つけては噛みつくようになったそうです。

資料提供／NPO法人沖縄伝承話資料センター



●公園全体で遊ぶ

新春果報で〜びる

沖縄に伝わる華やかな琉舞や勇壮なエイサー、獅子舞の鑑賞や、羽根つき、カープヤー(鳳)作りなどお正月ならではの遊びも体験できます。今年のお正月は海洋博公園で家族そろってお楽しみください。

- 1月1日(金)～1月3日(日)
- お問い合わせ/業務課 業務係
TEL0980-48-2741
- 場所 海洋博公園 無料



海洋博公園全国トリムマラソン大会

家族で楽しむ「ファミリーエンジョイ公園コース(3.5km)」、色とりどりのお花を楽しめる「フラワーガーデンコース(5.9km)」、緑の下を走り抜ける「備瀬福木並木コース(10km)」と、海洋博公園を中心とした豊かな自然の中で開催される人気のトリムマラソン。遅いあなたも主役です。

※申し込みは終了しました

- 1月17日(日)
- お問い合わせ/海洋博公園全国トリムマラソン大会事務局0980-48-2741

場所 海洋博公園 参加料 有

第5回 美ら海花まつり

約20万株の草花や観葉植物に加え、菊花などを用いて公園を彩ります。ジンベエザメやシーサー、ヤンバルテナゴコガネなどをかたどった花の造形物や噴水の周りに敷き詰められたお花の絨毯など、花いっぱいの公園で、暖かい沖縄の冬を満喫してください。

- 1月30日(土)～2月28日(日)
- お問い合わせ/海洋博公園管理センター
TEL0980-48-2741



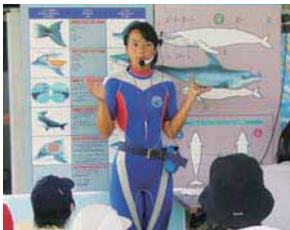
場所 海洋博公園 無料

●生き物とふれあう

冬休み イルカ学習会

イルカたちについて楽しく学ぶ「イルカ学習会」。今回のテーマは「イルカ達の体の構造について」です。体の内部の様子から健康管理まで、楽しく学習します。

- ※定員：なし(場所は40名程度参加可能)
- 12月26日(土)～1月3日(日) 15:00～15:20
- お問い合わせ/海獣課 TEL0980-48-2748



場所 パークセンター及びイルカラウン周辺 無料

海洋博公園わくわく夜のイルカ広場

「仔ガメとのふれあい」、「夜のイルカショー」や「マナティーの水中給餌」など初めてのプログラムによる楽しいイベントを開催します。

- (1)仔ガメとのふれあい：今年生まれた仔ガメを間近で観察できます
時間 17:00～18:00 場所 ウミガメ館 参加料 無料
 - (2)夜のイルカショー：イルカショー、イルカに関するクイズ、イルカの観察会などを開催します。
時間 18:00～18:15 場所 オキちゃん劇場 参加料 無料
 - (3)マナティーの水中給餌：ダイバーによるマナティーへの水中給餌と解説を行います。17:30～18:15、18:30～19:00はBGMを流します。静かな音楽の中、マナティーたちとゆったりお過ごしください。
時間 18:15～18:30 場所 マナティー館 参加料 無料
- 12月29日(火)～1月3日(日)・1月9日(土)～1月11日(月)
 - お問い合わせ/海獣課 TEL0980-48-2748

海洋博公園管理センター

冬休み マナティーしく体験

マナティーへのエサの準備、エサやりなどの飼育体験や、マナティーの体のしくみやジュゴンとの違いなどを学べます。

- 申込方法：当日受付・抽選(定員20名)
- 受付時間：15:45～16:15 抽選：16:16
- 受付場所：マナティー館前
- 参加条件：小学生以上(小学生は保護者同伴)
- ※保護者も定員に含む
- ※車椅子、障がいを持つ方のご参加の場合、事前にお問い合わせ下さい。
- 12月24日(木)～12月26日(土)・1月1日(金)～1月3日(日) 16:30～17:15
- お問い合わせ/海獣課 TEL0980-48-2748



場所 マナティー館 無料

干支水槽

平成22年の干支(寅)にちなんだ生物を円柱水槽にて展示します。元日から3日間は、お正月らしい装飾でみなさまをお待ちしています。

- ※展示予定生物
トラギス類、オグロトラギス、ニシキエビ、トラフカラッパ、ホシダカラ
- 12月27日(日)～1月3日(日)
- お問い合わせ/魚類課 TEL0980-48-2742

場所 沖縄美ら海水族館 入館料のみ

黒潮探検自由観覧

黒潮の海大水槽を、水槽上部から観覧する「黒潮探検コース」が、冬休み期間中、予約不要でご自由に見学可能となります。また、解説員による展示解説もごさいます。

- 12月19日(土)～1月11日(月)
- 8:30～閉館まで(ただし14:30～17:30は観覧できません)
- 閉館30分前に入場が締切りとなります。
- 展示解説時間
10:00、10:30、11:30、12:00、12:30、13:30、14:00、18:00
- お問い合わせ/魚類課 TEL0980-48-2742

場所 沖縄美ら海水族館 入館料のみ

●花と緑とふれあう

沖縄国際洋蘭博覧会

沖縄の冬のビッグイベントである国内最大級のラン展。会場となる熱帯ドリームセンターの大温室では、国内外から出展される1万点以上のランが美しさを競います。今年は「ラン宮殿」をテーマにラン噴水やランドレスなど会場をランで華やかに演出します。期間中は、ランに関する各種イベントも充実。南国沖縄でひと足早い春を楽しんでみませんか。

- 2月6日(土)～2月14日(日)
- お問い合わせ/沖縄国際洋蘭博覧会事務局
TEL0980-48-3624



場所 熱帯ドリームセンター 入館料のみ

植物のクラフト作り

毎月違ったテーマで、花や葉っぱを使ったクラフト作りが体験できます。

※毎日開催
※団体(10名様以上)でご利用の際は、事前にご連絡ください。

- 1月：押し花・押し葉でオリジナルカレンダー作り ころころボール作り
- 2月：木の実・タネを使ったクラフト作り アダン葉を使った沖縄に昔から伝わる星コロ作り
- 3月：押し花・押し葉でオリジナルしおり作り クロツグ(ヤシの仲間)の葉を使ったバッタ作り
- お問い合わせ/熱帯・亜熱帯都市緑化植物園
TEL0980-48-3782

場所 熱帯・亜熱帯都市緑化植物園 無料

総合研究センターでは、沖縄の動植物に関する調査研究等を行い、環境問題への対応や、沖縄の産業並びに公園の利用に役立つような各種教室や講演会等を企画しています。

総合研究センター

美ら海自然教室・美ら島自然教室

フィールドで見つけることのできる動植物やその標本を、身近な道具や顕微鏡等を用いて観察をします。そして、生物の不思議や面白さ、観察のしかた、生態系や環境の重要性などを紹介します。

- 日時：1月～3月(予定)
- 講師：(財)海洋博覧会記念公園管理財団 職員、または有識者
- 料金：無料



美ら海自然教室の様子

美ら島自然教室の様子

美ら島・美ら海こども工作室

サンゴ礁に棲む様々な生き物たちを主とした自然物を活用して、多様な玩具作りを行い、伝統的な自然物の活用方法の体得や創造性を養います。

- 日時：1月～3月(予定)
- 講師：(財)海洋博覧会記念公園管理財団 職員、または有識者
- 料金：無料



こども工作室の様子

調査研究・技術開発成果発表会

当財団が実施している調査研究・技術開発及び「平成20年度調査研究・技術開発助成事業」の成果発表会を行います。

- 日時：3月(予定)
- 講師：平成20年度調査研究・技術開発助成事業 実施者
- 料金：無料

沖縄の花・緑コーディネーター研修

沖縄に適した緑化植物や花の街づくりの知識に精通した人材を育成し、花と緑あふれる潤いのある街づくりを推進するための研修を実施します。

- 日時：1月～3月 2回予定
- 対象者：沖縄の花・緑コーディネーター研修者(平成21年度募集済み)

【お問い合わせ】総合研究センター普及開発課 TEL 0980-48-2266

※各イベントの申し込みは、実施日の1ヶ月前より開始いたします。

※各イベントは内容の変更や中止となる場合がございます。最新情報や詳細はHP(kaiyohaku.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。

首里城公園管理センター

第18回首里城公園「新春の宴」

- 実施日：平成22年1月1日(金)～3日(日)
- 場 所：首里城公園 御庭・下之御庭

【御座楽の演奏】

奉神門で毎朝8:30に行われている「御開門」後に王朝時代に演奏された御座楽を3日間毎日開催します。

- 実施日：1月1日(金)～3日(日)
- 時 間：8:30～8:50(予定)
- 場 所：首里城公園 御庭
(雨天時の場合は、正殿内部)
※有料(入館料)



平成20年度 新春の宴 朝拝御規式「子之方御拝」の様子

【正月儀式 朝拝御規式】

第一部「子之方御拝」、第二部「朝之御拝」、第三部「大通り」の3部構成で琉球王朝時代、国王、王妃、高官等の参列する中、執り行われていた朝賀儀式を披露します。

- 実施日：1月1日(金)～2日(土)
- 時 間：10:00～11:50(予定)
- 場 所：御庭 ※有料(入館料)

【国王・王妃出御】

御座楽の演奏とともに、国王・王妃が揃って正殿から出御します。

- 実施日：1月3日(日)
- 時 間：10:00～11:00(2回予定)
- 場 所：御庭 ※有料(入館料)

【琉球芸能の宴】

新春を寿ぐ琉球舞踊(古典舞踊、雑踊り)、地域の民俗芸能などを披露します。

- 実施日：1月1日(金)～3日(日)
- 時 間：12:30～17:00(予定)
- 場 所：下之御庭 ※無料

【御茶・甘酒の振舞い】

本部席横に振舞いコーナーを設け、紅型衣装を身に纏った女性より御茶・甘酒が振る舞われます。

- 実施日：1月1日(金)～3日(日)
- 時 間：8:30～17:00(予定)
- 場 所：下之御庭 ※無料

首里城花まつり

- 実施日：1月下旬～2月(予定)
- 場 所：首里城公園内 ※無料



平成20年度 那覇市立城西小学校「タイトルボード完成式典」の様子

【首里城花まつりタイトルボード完成式典】

那覇市立城西小学校、城南小学校生児童によるデザインのタイトルボードを児童と一緒に完成したタイトルボードを披露します。

- 実施日時
1月下旬 那覇市立城西小学校(予定)
2月上旬 那覇市立城南小学校(予定)
- 場 所：首里城公園内 首里杜館レストセンター前

【花まつりクイズラリー】

首里城公園にちなんだクイズをラリー形式で回答していただくと、粗品が貰えます。さらに、アンケートにお答えいただいた方に抽選でオリジナルグッズを進呈いたします。

- 実施期間：1月下旬～2月(予定)
- 場 所：首里城公園内 ※無料

企画展 IV江戸時代の琉球 ～献上された琉球楽器～

江戸上りの琉球大使節は、江戸城など、様々な場所で御座楽という中国風の室内音楽の演奏会を披露していました。復元された尾張徳川家の22点の琉球楽器一式を展示して御座楽に使われた楽器とその装飾の美しさを紹介します。

- 実施期間
平成21年12月29日(火)～平成22年2月5日(金)
- 場 所
南殿二階特別展示室 ※有料(入館料)



【お問い合わせ】首里城公園管理センター TEL 098-886-2020

※各イベントは内容の変更や中止となる場合がございます。最新情報や詳細はHP(oki-park.jp)等でご確認して頂くかお気軽にお問い合わせください。